

令和2年度とっとり県民カレッジ講座（市町村連携）

主催：鳥取県立生涯学習センター

共催：西部地区社会教育担当者研究協議会

## 地域を育む「サードプレイス」

9月26日（土）13：00～16：30に、米子市文化ホールで「とっとり県民カレッジ講座～地域を育む『サードプレイス』～」を開催しました。講師は、鳥取大学教員養成センター准教授の大谷直史さん。「第3の居場所の可能性」と題して、「サードプレイス」についてとご自身の居場所づくりの実践についてご講演いただきました。その後、居場所づくり活動を実践している3人の方の実践発表と参加型パネルディスカッションを行いました。参加者からは「とても興味深い内容で、脳を刺激されました」「自分の知らない所でたくさんの居場所づくりが行われていることを知って驚きました」「居場所づくりをやってみたいと思いました」「ライブ配信やスマホを通じてのアンケートなど、新しい取組がおもしろかったです」等の感想がありました。



講師の大谷直史さん



実践発表① 芝由紀子さん  
（一社）ダイバーシティうなん toiro 代表理事）



実践発表② 水田美世さん  
（皆生の居場所「ちいさいうち」 管理人）



実践発表③ 井上可奈子さん  
（南部町地域おこし協力隊 てま里担当）



大好評だった県立図書館  
の出前図書館！

### 参加型パネルディスカッション



Google フォームや質問用紙で参加者  
からの質問や意見を受け付けました。



感染症対策もバッチリ！

講座中、Google フォームや質問用紙を介して、参加者から質問や意見をたくさん受けつけましたが、時間の都合により講座中に回答することができなかつたため、後日、講師の大谷さんと実践発表者の皆さんから回答をいただきました。ぜひ読んでいただき、内容についてさらに理解を深めていただければと思います。

Q1. サードプレイスが、高齢者福祉の課題解決に寄与する可能性について、お考えがあればお伺いしたいです。

A1. 【大谷さん】

居場所づくりは、高齢者の幸福感を高めるためにも重要な課題だと思います。福祉の対象としてよりも、趣味や遊び、何か役に立つことができる場であれば参加しやすい層もいると思います。一方で福祉施設が、スタッフと利用者という関係性を超えて、居場所になっていくことも必要だろうと考えています。

A1. 【水田さん】

可能性は大いにあると思います。ちいさいおうち子どものための場所ですが、自分にも役に立てることがあるかもしれないと高齢の方からも声を掛けていただくことが多々あります。できるだけその方がやりたい方法や得意な方法で無理がなく、かつこちらにもニーズをお伝えしてサポートをお願いしています。例えば、料理好きな方には食事の下ごしらえをお願いするとか、おしゃべり好きの方には、ちいさいおうちのことを宣伝していただくとか。世代間の交流は子どもの成長にはとても大切だと思いますし、それぞれの世代の孤立化を防ぐことができるとも考えています。

A1. 【井上さん】

てまりの交流スペースは世代・性別・年齢関係なく自由に予約なしで利用でき、高齢の常連さんは、「若い人との出会いや交流があって楽しい、友だちができた」とご意見をいただいています。また絵手紙や囲碁など、趣味の会を開く会場としてもご利用いただいたり、野菜市を開催したりと、様々な出会いや生きがいの創出に寄与しています。

Q2. 実践発表の中の「一人一人の豊かな暮らしが地域の豊かさに繋がる」という言葉が胸にしみました。おききたいのは、活動を長く続けていくためにも行政との連携も必要だと思っていますが、その辺りの関係をどう作っていくのか、なにかお考えがあったらお伺いしたいです。

A2. 【芝さん】

「サードプレイス」自体が、何かの目的達成や課題解決への手段である場合は、関係機関や行政との連携が必要になると思います。関係を築くには実績をつみながら時間をかけて信頼を得ていくしかありませんが、地域の声、個人の声を集め現状と課題をしっかりと伝えられるようになる必要があると考えています。

A2. 【水田さん】

行政は子どもを地域で育てるために欠かせない機能です。子どもにとってあまねく必要なことを実現するためには行政の力なくしては実現できません。現場で行政への要望として訴える必要がある場合には、躊躇することなく積極的に働きかけるようにしています。

A2. 【井上さん】

立ち上げの段階から行政と連携し、地域住民の居場所を住民主体で運営するにはどうすればいいか話し合いを重ねてきました。地域おこし協力隊制度の活用や、情報提供を双方向で行っています。

Q3. 活動資金はどうしておられるか。贈与やボランティアだけでは自分の生活が厳しいですね。

A3. 【大谷さん】

個人的には、居場所が自分の家庭であると思っているので構わないのですが、それだけでは広がりを持ちえないでしょう（誰もができないという意味で）。公的な助成金なども頂いていますが、そうなるとうちでも仕事のような感じにもなっていて、一定の成果を出さなくてはいけないとか思ったりもし、自分にとっての居場所でなくなっていくようにも思います。もっとみんなの贈与が回るシステムを考えたいと思っていますが、これは今後の課題です。

**A3. 【芝さん】**

場づくりは個人で行っています。イベント等で参加費はもらったり助成金を活用したりもしますが、基本的に施設の整備等は手出しです。平日は団体で仕事をしていますので、団体から給与をもらっています。

**A3. 【水田さん】**

ちいさいおうちの活動は確かに貨幣経済の中での仕事としては成り立っていませんので、自分の生活資金を得るためには別に賃金を得る仕事を持っている必要があります。ただ、ちいさいおうちの活動自体は集う人たち自身がやってみたいことや学びたいことを実現したり、楽しいと思うことを一緒に作っていく場です。なので、私も管理人をやりながら自分や自分の子どもたちの楽しみを追求できるので、そういった意味では金銭的なレベルでは計れない本来の意味での「経済」つまり、経世済民（けいせいさいみん、経世済民）「世（よ）を経（をさ）め、民（たみ）を濟（すく）ふ」活動は十分に行われているのではないのでしょうか。私自身は、ちいさいおうちとして活動できることで失うものより得るものの方が圧倒的に多いと感じています。

**A3. 【井上さん】**

てま里の交流スペースの家賃・光熱費は基本的に宿泊・レストランの売り上げから賅っています。

**Q4. 居場所作りを進行中です。長く続けるためにどんなことが必要でしょうか。**

**A4. 【大谷さん】**

自分の居場所でもあることにこだわることはないかと思います。そうでないと長続きしないし、そもそも居場所じゃなくなってしまいますからね。でもこれは自分の好きなようにするというのではなく、他者にとっての居場所でもあるように自分を変容させることでもあります。そうした柔軟性が大事ということでしょうか。

**A4. 【芝さん】**

無理のない範囲で小さく始めることでしょうか。

**A4. 【水田さん】**

まずは自分が楽しいかどうか、が大事ではないでしょうか。自分以外の人に尽くすだけの人生はあまり健全とは思えませんし、働きかけの理由を自分起点ではなく自分以外の他人に押し付けるのは余計なお世話ではないかなと私は思っています。自分がどうしたいのかを常に明確にしておくことは大事なことだと思います。

**A4. 【井上さん】**

With コロナを認識しながら、新しい生活ライフに基づいた交流活動に向けて、日々試行錯誤しています。

**Q5. 日本人はマイプレイス型のサードプレイスを持つ傾向が強いのではと感じます。しかし、そのようなサードプレイスを持つ助けになるような活動をあまり見かけない。やはり、サードプレイスを持つには自己発見という方法が主になってしまうのでしょうか？**

**A5. 【大谷さん】**

そうですね、日本で居心地のよい場所と言うと、誰にも邪魔されない喫茶店とか図書館とか、一人でゆったりできる場所を想定しがちですね。で、そういう場所はプライベートなので、自己責任で見つけてくださいということになりがちなのでしょう。自分で発見できる人はそれでよいかもしれませんが、問題はそうではない人。動いていないと動く欲望も萎えてしまうので、格差が広がるばかりだろうと思います。

**Q6. 実践発表者の皆さんは、サードプレイスを運営することでご自身にはどんな影響がありますか？実践していて良いこと、しんどいことは？**

**A6. 【芝さん】**

良いこと・・活動の理解者や応援者が増えること

しんどいこと・・常に人が足りず走り回っている状態で余裕がないこと

**A6. 【水田さん】**

自分のことや自分の子どものこと（性格や生活スタイルや趣味嗜好など）を知ってもらえるようになったのは大変良かったと思います。自分のことを気に掛けてくれる人が確実に存在すると実感できると、それは人生において何よりも生きるパワーになります。しんどいと感じることは、今はほとんど無いです。年を経るごとに理解者や仲間が増えていくのを実感していて、それはとても幸せです。

**A6. 【井上さん】**

正直しんどいことだらけです。特に今年は「交流」を昨年より発展させようと意気込んでいた矢先のこと、コロナ禍で居場所兼宿泊所として、何を目指せばいいのか分からなくなった時期もありました。今はコロナに対する認識の変化や、新しい生活様式が浸透し始めたので、それに合わせて1つずつできることを進めていければと思っています。良いことは、使ってくれる人が「いい出会いがあった、楽しかった」と喜んでくださる瞬間です。

**Q7. 皆さんがそれぞれいわゆるサードプレイスを構築されることになったきっかけは何だったのですか？**

**A7. 【大谷さん】**

子どもの成育や学力問題などを考えるなかで、家庭間の格差が大きいことに気付きました。それはあまりに不平等に思え、家庭に代わり得る、あるいは家庭で想定されるような親密な人間関係を提供できるような場所が必要だと考えたからです。わたしの場合は、頭から入っている感じです。

**A7. 【芝さん】**

団体立ち上げ後は基本的に地域の交流センターや自治会等へこちらが出て行く形で活動をしていましたが、それでは活動が伝わりにくく、拠点が必要だと感じたためです。拠点での定期的な活動から地域全体に広げていきたいと考えています。

**A7. 【水田さん】**

ちいさいおうちの母体となっている「子どもの人権広場」は、私の両親が1996年から仲間と続けてきた活動です。高校生の時からその様子は間近に見ていました。大学進学以来、米子からは離れて生活していましたが、帰省した際などに両親から活動の話聞くこともありましたので、様子は把握していたと思います。でもあまり興味はなかったんですね。転機はやはり自分が子育てをする段階に入ってから。子どもを育てることの大変さを身をもって感じて、改めて両親の活動の重要性を認識しましたし、子育てはそれぞれの家庭のみで完結するものでは到底ないのだということも実感したんです。なので、私自身に必要なことだと思ったので米子に帰ってきてからは自分にできる方法で活動に加わるようになったのがきっかけです。

あとは、前職が美術施設の学芸員だったということもあり、アーティストさんと活動したりプロジェクトを実施する拠点にもなったらきっと素敵だろうなと思っていました。なのでちいさいおうちの建物のリニューアルにはこだわって関わりました。

**A7. 【井上さん】**

私個人のきっかけは、地域の子どもたちが、いろいろな大人と出会う場所を作りたいと考えたことです。

**Q8. 路地や神社の境内が子どもたちのサードプレイスなら、確かにそれがなくなりつつあるので、人工的に創る必要が出てきたってことも言えますかね？**

**A8. 【大谷さん】**

その通りだと思います。かつてはなんでもない場所やいかようにも使える場所がたくさんあったのに、なんとなくいてもよい居心地のよい場所が少なくなったのだと思います。私有地の規制が強くなったということもあるように思います（責任の所在を問われるようになったこともあるでしょう）。

**Q9. 高齢者が来られることもありますか？**

**A9. 【大谷さん】**

利用者でも何名か来られますが、子ども食堂のボランティアとして来られる方が多いです。何か役に立ちたいと考えている方に、贈与の宛先を提供することも大切だと考えています。ただ、女性はそれで結構来てもらえるのですが、男性になかなかアプローチできていません。

**A9. 【芝さん】**

活動内容によって参加者の世代もばらばらです。高齢の方が参加されるときもあります。

**A9. 【水田さん】**

A1. の答えと重複するかもしれませんが、高齢者の方もそれぞれが心地よいと感じる内容で無理のない範囲でちいさいうちの活動に関わってくださっています。子どもたちが集まる時に来て子どもたちと遊んでくださることも多いです。また、母体の「子どもの人権広場」は私の親世代が中心となっているグループで、徐々に孫世代の子育てに入っている世代の方も非常に多いです。そのため活動における高齢者の割合は結構多い方だと思います。

**A9. 【井上さん】**

あります。行政と連携して、地域ボランティアの方を中心に、月に1回地域内の認知症勉強会などを開催し高齢の方々との触れ合いの場作りをしています。

**Q10. サードプレイスづくりを続けていくコツを教えてください。**

**A10. 【大谷さん】**

やはり無理をしないことだと思いますが、そのためにはまず自分にとって居心地のよい場所でなくてはならないでしょう。やっかいな出来事も起こるでしょうし、ちょっとしたことで腹を立てる自分に自己嫌悪をもよおすこともあります。そうしたことも意外性のあるおもしろい出来事と捉える構えがあれば、きっと何とかあります。

**A10. 【芝さん】**

無理のない範囲で小さく始めること、自分自身がやりたいことを形にして楽しむことでしょうか。

**A10. 【水田さん】**

A4. の答えに加えるならば、自分が苦手なことやできないことは無理をせずにほかの人に頼むという力も必要かなと思います。人間は不思議なもので、頼られることって結構嬉しいのではないかなと思っています。お願いするときは常に感謝の気持ちを言葉や態度で表現しつつ、ちょっと難しいかもというレベルのことも、思い切ってお願いしてみて任せてしまうとうまくいくことも多いと思います。それに一緒に活動できる仲間がいるとやっぱり心強いです。

**A10. 【井上さん】**

まだ2年目ですが、できることを1つずつ実行しています。できないことは地域の方が全力でサポートしてくださっており、感謝しかありません。

**Q11. 関係弱者との格差の広がりのお話をされていました。居場所があることを知ると、私も含めて繋がりを持ちたがる方や関係作りが上手い方は、すぐに飛び付かれるのですが、子ども食堂にしろ居場所にしろ、本当に来てほしい方や必要としている方へは、どのようにしたら居場所の存在が伝わるのだろうか？といつも思います。**

**A11. 【大谷さん】**

そうなんです。支援はいつも、必要としている人には届かないのです。それをいくらかでも回避するのは、偶然性だろうと考えています。たまたま何かで知り合ったことをきっかけにして、関係を持つことができればと思っています。個人情報の問題もあって、そうしたルートも狭くなってしまいましたが。

**A11. 【芝さん】**

私たちも日々悩んでいます。相手の状況を見ながらひとりひとりに声掛けをしていますが、上手くいくときもありますしダメなときもあります。何年もかけて関係を築いてもその後また連絡が取れなくなったりもします。直接会って話せるのが一番ですが、ラインでつながったり電話をしたりどこかでつながることをまずは大切にしています。「こちらがいつでも同じ状態である」ことが大切かと思っています。

**A11. 【水田さん】**

ちいさいおうちでは、大勢の人が楽しめる内容の時と、少人数でじっくり考えたり話し合いたい内容の時と、緩急をつけて企画をしています。子ども向けだけでなく、むしろ子どもに普段から関わっていたり、子どもへの意識を持っている大人向けに読書会や勉強会などの名目で場所を開けることも相当数やっています。いずれもその企画ごとに個々の人のアンテナに届くように広報することを心掛けています。また、地域の中で気に掛けていきたい子どもやご家庭などがある場合には、近所で偶然出会ったりするときに直接声を掛けて何気なく会話をするようにしていますし、その子が好きそうなイベントには直接何度でも誘うようにしています。

**A11. 【井上さん】**

これは本当に難しいと思います。いろんなタイプのイベントやきっかけづくり、声かけを積み重ねながら地域住民の方々と一体的な取り組みや、情報発信が必要と感じています。

**Q12. サードプレイスの運営で、継続するために必要な資金や人材などの課題について、思われることはありますか？**

**A12. 【大谷さん】**

やはりこれは人が大きいですね。タイミングもあるのですが、誰かにとって居場所となるためには、そこにいる人と波長と言うか空気と言うか、言葉にできない何か合わない。だからスタッフはなるべく多様性があった方が望ましいのです。別の誘因（たとえば仕事）でも引き付けることはできますが、なくなればそれまでですからね。

**A12. 【芝さん】**

資金不足（十分な人件費がない→人材不足）は常に目の前にある課題です。

**A12. 【水田さん】**

ちいさいおうちの活動資金は、母体の「子どもの人権広場」の会費をベースとして、それ以外にも官民さまざまな補助金や助成金を活用させていただいています。補助金や助成金は人件費に使うことができないものが多いので、そこは非常に苦勞を感じる場所です。人材については、今のところ「子どもの人権広場」の会員さんをはじめ地域の方々にも徐々に理解を得て支えられているのでありがたいですが、強いて言えば、ちいさいおうちが常時開けておくことができるように日中に動ける人材が多く確保できたら良いですね。現在はそれができていないのは大きな課題かなと思います。

**A12. 【井上さん】**

自ら資金を生み出す仕組みを考えないと継続は難しいと思います。イベント等においても、地域の方にも赤字にならない程度の参加費はいただき、みんなで居場所を支えてもらうようお願いしています。

**Q13. サードプレイスを実現するために学生にできることはありますか？**

**A13. 【大谷さん】**

学生という属性は多くの方がアクセスしやすいという特徴があると思います。どんな経験も、「勉強だよね」の一言で片づけられるし、便利なのです。そうした便利な人がいるだけで、サードプレイスは気楽なものになるので、いるだけでよいのでいてください。

**A13. 【芝さん】**

学生さんだからこそ出来ること、力を発揮できる部分があると思います。どの団体も学生さんにお手伝いして頂きたい事がたくさんあるはず。是非関心のある場に行って直接聞いてみてください。

**A13. 【水田さん】**

ちいさいおうちに集う小学生くらいまでの子どもさんには、大人ではない年の近い年長者の存在はすごくニーズがあって、来てくださったら大人気になります。ぜひイベントごとに参加していただいて、小さい子たちと遊んだり話し相手になってもらえたらとっても嬉しいです。

**A13. 【井上さん】**

たくさんあります。まずは何か1つでも形にしてみることにしたいと思います。  
てま里を使ってやってみたいことがあればぜひ一緒にやりましょう。

**Q14. 「贈与が主経済」は、子どもをターゲットにするなら納得できるが、それだけでよいのか。社会人やお年寄りをもターゲットに含めるなら、カフェや居酒屋のようにお金を払ってもらう仕組みがあるほうが、人が来やすいのではないか？**

**A14. 【大谷さん】**

贈与は実は危険な側面を持っています。それは贈与を受けた人が何か借りをつくってしまったように感じてしまい、対等な関係ではなくなってしまうことです。そんなことを気にしない人ならよいのですが、そうでなければ対等性を確保しておくために交換経済を入れておいた方がよいでしょう。ただしそれは建前で、あくまで仮の目的であるということをお互いに了解していることが必要だと思います。

**Q15. コロナ後の生活が変わると言われていますが、これからの居場所はようになっていくと思われますか？**

**A15. 【大谷さん】**

居場所はそこに居ることが大切なので、「じゃあオンラインで」ということにはなりません。みんなでわいわいと過ごす居場所は運営が相当難しくなっています。共に過ごすこと自体が目的なのに、一緒にいてはいけないと言われる。禅問答のようですが、想像力を駆使してお互いの存在を感じることができる手法を考えなくてはなりません。これは宿題にさせてください。

**A15. 【水田さん】**

コロナ以降、ちいさいうちでの活動は屋外でできること中心にシフトしました。でも、屋外で安心と思ってなのか、コロナであまりお楽しみがないからなのか、各家庭の収入が減ってお金を掛けずに楽しめる場所を求めてなのか、明確な理由はわかりませんが、6月に活動を再開して以来、参加者は右肩上がりが増え続けています。これではいくら屋外活動をしていても、感染リスクは高くなってしまふなど危惧しています。ひとところに大勢が集まるのではなく、近所にいろんなそれぞれに特徴ある居場所が、小さくて構わないのでたくさん存在するようになることが理想ではないかなと思いました。

**A15. 【井上さん】**

With コロナを認識し、新しい生活様式を整え、安心・安全を確保しながら、維持、発展していく必要があると思います。